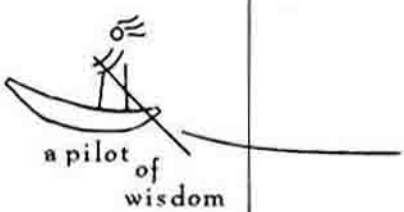
心の力

姜尚中
Kang Sang-jung

集英社新書
0722
C

心の力

姜尚中 Kang Sang-jung



姜尚中（カン サンジュン）

一九五〇年生まれ。聖学院大学全学教授、東京大学名誉教授。専攻は政治学・政治思想史。著書に、一〇〇万部超のベストセラー『悩む力』と『続・悩む力』のほか、『マックス・ウェーバーと近代』『オリエンタリズムの彼方へ』『ナショナリズム』『日朝関係の克服』『在日』『姜尚中の政治学入門』『リーダーは半歩前を歩け』など。小説作品に『母―オモニ―』『心』がある。

心の力（こころ ちから）

二〇一四年一月二二日 第一刷発行

集英社新書〇七二二C

著者……姜尚中（カンサンジュン）
発行者……加藤 潤
発行所……株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二-五-一〇 郵便番号一〇一-八〇五〇
電話 〇三-三二三〇-六三九一（編集部）
〇三-三二三〇-六三九三（販売部）
〇三-三二三〇-六〇八〇（読者係）

装幀……原 研哉
印刷所……凸版印刷株式会社
製本所……加藤製本株式会社
定価はカバーに表示してあります。

© Kang Sang-jung 2014

ISBN 978-4-08-720722-4 C0295

Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

a pilot of wisdom

目次

はじめに ―― 7

序章 「心の力」をつけるとは ―― 11

不安に怯えるつかの間の幸福感 12

ハンス・カストルプと「河出育郎」 19

物語人生論 16

二つのダヴォス 21

『続・こゝろ』① 進駐軍 ―― 25

第一章 現代という武器なき戦場 37
なぜ『こころ』なのか 38
「魔の山」の住人たち 44
マンが描いた二十世紀のヨーロッパ 41
第三の「戦後派（アプレゲール）」 47
『続・こゝろ』② 頬傷の男 52
第二章 なぜ生きづらいのか 67
代替案（オルタナティヴ）がない 68
やるべきことがわからない 75
〝隣人〟がいない 72
時代と心 79
『続・こゝろ』③ 秘密箱 84
第三章 「魔の山（イニシエーション）」の力 105
モラトリアムのすすめ 106
「先生」探し 115
卒業証書をもらっても 111
「秘義伝授（イニシエーション）」というもの 119

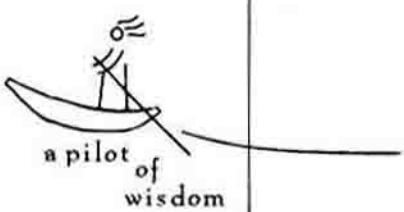
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

脱グローバリズム 126
『続・こゝろ』④ 洗礼盤 131
第四章 真ん中でいこう 141
偉大なる平凡 142
染まらないということ 146
人生の厄介息子 151
『続・こゝろ』⑤ 山の上のホテル 155
第五章 「語り継ぐ」ということ 165
デス・ノベル 166
死によって生が輝く 168
投げ出す力、受け取る力 172
消えない命のともしび 174
『続・こゝろ』⑥ 万年筆 181

終章　いまこそ「心の力」　193
『こころ』あらすじ　199
『魔の山』あらすじ　200
『魔の山』登場人物紹介　201
引用・主要参考文献　203
おわりに　204

心の力

姜尚中 Kang Sang-jung



目次

はじめに　7

序章　「心の力」をつけるとは　11

不安に怯えるつかの間の幸福感　12

ハンス・カストルプと「河出育郎」　19

物語人生論　16

二つのダヴォス　21

『続・こゝろ』①　進駐軍　25

第一章 現代という武器なき戦場 37
なぜ『こころ』なのか 38
「魔の山」の住人たち 44
マンが描いた二十世紀のヨーロッパ 41
第三の「戦後派（アプレゲール）」 47
『続・こゝろ』② 頬傷の男 52
第二章 なぜ生きづらいのか 67
代替案（オルタナティヴ）がない 68
やるべきことがわからない 75
〝隣人〟がいない 72
時代と心 79
『続・こゝろ』③ 秘密箱 84
第三章 「魔の山（イニシエーション）」の力 105
モラトリアムのすすめ 106
「先生」探し 115
卒業証書をもらっても 111
「秘義伝授（イニシエーション）」というもの 119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

脱グローバリズム 126
『続・こゝろ』④ 洗礼盤 131
第四章 真ん中でいこう 141
偉大なる平凡 142
染まらないということ 146
人生の厄介息子 151
『続・こゝろ』⑤ 山の上のホテル 155
第五章 「語り継ぐ」ということ 165
デス・ノベル 166
死によって生が輝く 168
投げ出す力、受け取る力 172
消えない命のともしび 174
『続・こゝろ』⑥ 万年筆 181

終章　いまこそ「心の力」　193
『こころ』あらすじ　199
『魔の山』あらすじ　200
『魔の山』登場人物紹介　201
引用・主要参考文献　203
おわりに　204

はじめに

私は、東日本大震災の前、愛する息子を亡くし、悲しみというよりは、自分の心がからっぽになる、心の無重力状態に陥りました。

肉体は確かにあるのです。痛いとか、心地よいとか、身体的な感覚はハッキリしているのです。でも、まるで魂が遊離し、心が頭の上から自分の身体を見つめているような、そんな心身の乖離（かいり）がずっと続きました。

やがて、少しずつ息子の不在という現実を受け入れていく中で、激しい悲しみに襲われ、涙が止めどもなく溢（あふ）れ出し、嗚咽（おえつ）することがありました。

心に重力が戻ってきたのです。

でも、その代償なのでしょうか、深い悲しみと苦しみが心を苛（さいな）むようになったのです。

その後は、我をふり返る日々が続き、心は萎（しぼ）んでいくばかりでした。

しかし、私は気づいたのです。息子とのかけがえのない日々は、決して失われることな

く、私の過去の中にしっかりとしまわれていると。この世に生きる者はみな、誰かに先立たれた存在であるはずです。そして先に逝ったかけがえない人びとの記憶が、人生に意味を与える物語の支えになっていることに気づいたのです。

父や母、恩師や親友、そして息子……。彼らは、過去になってしまいました。しかし、彼らは、ただ消滅したのではありません、生きている、過去として生きている、そして過去だけが確かに「存在」していると言えるのです。

こう思いながら、脳裏に浮かんだのは、夏目漱石の『こころ』でした。

初めて読んだのは、十七歳のころ。

人生が美しいなんて、決して言わせないぞ、若者が希望に溢れているなんて、嘘っぱちじゃないか――。

捻くれて、斜に構えながらも、自尊心だけは人一倍大きい未熟な若者、それが私でした。でも挫折の中で身を持て余しながらも、何かにすがりたい思いで一杯だったのです。

まだ高校生だった自分が、どこまでこの作品の深みを理解していたかは、定かではありませんが、わからないなりに、何か強い印象を受けました。

すべてを投げ打って自らを告白する先生と、その告白を受け取る「私」。その「私」が過去をふり返りながら、亡き先生の秘密を語る『こころ』は、先生から「私」への、死者から生者への、心の相続でもあります。いまを生きる「私」は、いわば、人生の謎(なぞ)に迫る「秘義」を先生から授かり、それをしっかりと受け継いで、次に語り継ぐため、先生について語り始めるのです。

この意味で死んでいった人びとは、みんな先生と言えるかもしれません。私たちは、こうした「秘義伝授(イニシエーション)」を通じて心の実質を太くし、「心の力」を自覚できるのかもしれません。

ところが、これとは反対に、過去を見失い、「出会った人びと」を見失い、ただひたすら未来を思い煩いながら現在という一瞬一瞬を生きている限り、心の力は見失われ、心は虚ろになっていくばかりではないでしょうか。

なるほど、過去をふり返らず、未来に向けて前向きに生きろ、そうした励ましの言葉は、耳に心地よく、肯定的なイメージを与えてくれるかもしれません。しかし、その肝心の未来そのものが、どうなるのか、皆目見当もつかないのですから、不安にならないのが、不

思議なくらいです。まだ「ある」とも言えない未来をあれこれと予測し、株価の乱高下のようなものに自らを託すとなれば、片時も落ち着いてはいられないはずです。

過去は意味がない、未来がすべてだ。

こうした時間にまつわる現代的な意識を逆転させて、むしろ確実に「ある」過去に目を向けさせ、そこから心の力の源へと遡（さかのぼ）る物語が、これから取り上げる夏目漱石の『こころ』であり、ドイツの作家、トーマス・マンの『魔の山』です。

心というものは、自分が何者であり、これまでどんな人生を歩んできたのか、「そして、それから」どう生きようとするのかという、自分なりの自己理解と密接に結びついています。この意味で、心の力は、人生に意味を与える物語においてのみ、よりよく理解できると思うのです。

それでは、心の力をつけるとはどんなことなのか、考えてみましょう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com